

パチンコ少年とツバメ

「宮本武蔵と佐々木小次郎との戦いは武蔵が勝ったけれども、これは武蔵の作戦勝ちだったんだ。武術の上では小次郎のほうが1枚も二枚もうえだったんだ。かれは燕返しといって鳥の中でもとても小さくてすばしっこい燕を刀で次から次に切り落として腕を磨いたんだ……」

担任の佐々木先生は授業中に話が脱線して佐々木小次郎の話が始まりました。

大次郎君はこの春小学四年生になり佐々木先生のクラスになったのですが、先生は昔から剣道をやっていたということでこの手の話が大好き。

特に先生と同姓の小次郎の話には力が入っていました。

先生のクラスになってまだ一ヶ月たらずだというのに佐々木小次郎の話はこれで3回目です。

しかもこの話になるとチャイムが鳴るまでとまらないのです。

でも大次郎君は授業よりもこの話のほうが好きでした。

先生の話聞くまでは大次郎君は小次郎より勝った武蔵のほうがなんとなく好きでしたが今では小次郎のほうが好きになりました。

大次郎君の町は標高100mから300mの小さな山々に囲まれた空気の透き通ったのんびりしたところでした。そこに住む人々は農業をやっているひとがほとんどで、当然たんぼやはたけが辺り一面に広がっていました。

また、サルやたぬき・キツネ・いたち・いのしし・しか・うさぎ・リスといった野生動物やキジ・きじばと・とんび・さぎ・かもなどの野鳥その他たくさんの生物が棲息していました。

そんなところで育った大次郎とその仲間たちは毎日野山をかけずりまわって遊んでいました。

またメンコやビー玉それに飛行機とばしといった伝統的な遊びもいつも真っ暗になるまで

やっていました。中でも大次郎君は何をやっても一番上手でした。

2

ある日大次郎君のクラスメートの宮本武君が面白い遊びをやっていました。

それはふたまたの木の枝に太めのゴムをとりつけ小石や紙を丸めて玉にしたものを飛ばして標的にあてるというものでした。

「武ちゃん。それ何?。」

「パチンコっていうんだ。簡単だから大ちゃんも作りなよ。」

大次郎君は早速、山で適当な木を探してきてパチンコを作りました。

「じゃあ大ちゃん。あの空き缶に当ててごらんよ。」

武ちゃんは塀の上に置いてあるジュースの空き缶を指さしました。

「エイッ！」
大次郎は空き缶めがけて小石を飛ばしました。

しかし小石は全然見当ちがいの方向にとんでいきました。二回、三回……。何度もやってみましたが一度も命中しませんでした。

「ハハハッ。大ちゃんのヘタッピ。僕がやるからみてろよ。」

カーンッ。

「そうら一発だ。」

武ちゃんがあまりに得意気にするので大次郎君は腹がたってきました。

そうして負けずにこれでもか、これでもかと石を飛ばしましたが空き缶にはあたりません

でした。その日から大次郎君の特訓は続きました。

今まで友だちに負けたことのない大次郎君にとってこの日のことは屈辱的なことだったのです。

次の日から大次郎君は朝早く起きては練習、また学校が終わるとすぐに帰宅して夕方日が暮れるまで練習とパチンコの猛練習を続けました。

それから何日かして学校ではパチンコが大はやり。

大次郎君の腕もかなり上達していましたが、武ちゃんにはかないません。

武ちゃんは学校の英雄的存在でした。

大次郎君はその後は更に厳しい特訓を続け、10m離れたところにある空き地でも百発百中（ちょっと大袈裟）当たるようになりました。

3

大次郎君が上手になると学校でもその噂が広がりました。

そして武ちゃんと大次郎君はどちらが学校で一番パチンコが上手かということがみんなの関心の的となるようになりました。

教室ではみんなの関心が集まる中、武ちゃんはおちつきはらった様子で

「ぼくの方がうまいに決まってるよ。第一大ちゃんにパチンコを教えたのはぼくなんだから。」

と、いうと、すかさず大次郎君も

「あの時は初めてで要領がよくわからなかったんだ。今やれば武ちゃんにだって負けないよ。」

二人ともなかなか譲りません。

そこでどちらが一番かを決める勝負をすることになりました。

「じゃあ明日の土曜日。授業が終わったら学校の西のがんりゅう川の河原で勝負だ。」

武ちゃんはそう言い残すとサッときびすを返して教室を出て行きました。

(そして約束の放課後)

大次郎君とクラスメートは既に集まっていたが、宮本君はなかなか現れません。

1時間、2時間と時間が過ぎて行きます。みんなは退屈しのぎに河原で魚やザリガニを採ったり、石投げをしたりしていましたが、それでも宮本君はやってきてそうにありません。

「武ちゃん。もうこないんじゃない?」
誰かがそういいました。しかし大次郎君はすかさず、

「きっと来るよ。先生も言ってたろう。武器はわざと時間を遅らせて小次郎をじらせたって。きっと武ちゃんもその作戦のつもりなのさ。」

午後3時を過ぎた頃、ようやく宮本君が姿を現しました。

武「みんなごめんよ。うちの白(犬)が病気で死にそうだったんだ。」

みんなのなかのひとり「ええっ。もういいのか?」

武「うん。さっき父さんといぬねこ病院につれてった。食あたり。」

大次郎「いいんなら早くやろう」

大次郎君はいらつかないように、いらつ
かないようにと自分にと自分に言いきかせていましたが、やはりすこしばかり焦っていたようです。

そうこうするうちに宮本君との勝負が始まりました。

大次郎「10メートル離れたところに缶を10缶並べてたくさん倒した方の勝ちっていうルールでどう？」

武「うん。それで構わないけど。」

さすがは学校で一・二位を争う好敵手。

自分たちの決めたルールで勝負がはじまりましたが二人共難なく全部の空き缶を倒してしまうので距離をすこしづつ延ばしていきましたが結果は同じ事でした。

そしていつしか日も暮れはじめ一人、二人とこの勝負を見ていた仲間が帰っていき、最初に比べて半分くらいに減った頃、

武「だいちゃん、じょうずになったね。これじゃ勝負がつかないよ。」

みんなのうちのひとりA「二人共すごいよ。すごすぎるよ。5年や6年のやつだって武ちゃんとだいちゃんよりうまいのはいないよ。」

みんなのうちのひとりB「そうだよ。二人とも一番。引き分けでいいんじゃない。」

武ちゃんは大次郎君の方をふりむきながら言いました。

「引き分けだな。」

数時間戦って大次郎君はすごく疲れていましたし、指の皮もいまにもむけてしまいそうです。

しかし『打倒武ちゃん』と心に決めて武ちゃんに勝つためにここまで頑張ってきました。

その結果が引き分けではどうしても納得がいきません。

そうかといってもうお月様が出る時刻にちかづいてきましたし、みんなの家の人が心配しないうちに帰らなければなりません。

大次郎君は最後に武君にもできないような芸当を見せて決着をつけたいと思いました。

そして、何気なく夕空をみていると名案が浮かびつきました。

でもこれは大次郎君も今までやったことのないなさに一世一代の大勝負です。

しかしどうしても決着をつけたいために勇気を出してみんなに声をかけました。

「みんな。最後。これが最後だからぼくの腕前を見てくださいよ。」

大次郎君はそういうと最後の力を振り絞って天に向かってパチンコの玉を放ちました。

するとはるか遠くで群れをなして飛んでいたツバメのうちの一羽に命中してヒラヒラと落下していくのが見えました。

このツバメたちは今年巣立った若いツバメたちで寒い季節がやってくる前に南国に飛び立つための飛行訓練をしていたのです。

大次郎君は大急ぎで落ちたツバメに駆け寄ると大事そうに抱えてみんないるほうに持ってきて自慢気に言いました。

「へへっ。凄いだろう？これが燕返しさ。」

ツバメは左側の翼の小翼羽の部分の羽毛が削ぎ落とされてそこから血が出ていました。

どうして飛べなくなったのかわからないらしく大次郎君のてのひらで空しく右側の翼だけバタバタさせてくるくと回転していました。

「かわいそう。」

だれからとなくそんな言葉が発っされました。

「パチンコをそんな風に使っちゃいけないよう。」

みんな大次郎君を責めました。
大次郎君はびっくりしました。

みんなに絶賛されるだろうと思っていたのですが逆に非難の声を浴びせられてしまったのです。

「なんでだよ。佐々木小次郎だって燕を切ったんだよ。」

「燕も生き物だぞ。生き物の命を粗末にしたらいけないのに決まっているだろう。」

「そうだよ。」

「かわいそうだよ。」

「そうだよ。」

勝負のことしか考えていなかった大次郎君はみんなに責められて悲しくなってきました。

そしてとうとうしゃがみこんで泣き出してしまいました。

4

「大ちゃん。いぬねこ病院に行こう。」

今まで黙っていた武君が言いました。

「今ならまだこのツバメ助かるよ。」

「うんっ。」

大次郎君は武君の言葉に素直にうなずきました。

こんなことがあって世紀の対決は中止になりました。

そして大次郎君は武君に付き添ってもらってケガをしたツバメを診てもらうため町のいぬねこ病院に向かいました。

いぬねこ病院は町にあると言ってもかなり外れのほうにありました。

学校からも2・3キロ離れていて二人がそこに着いたの頃にはもう日が暮れていましたから病院も閉まっていた。

「先生っ。先生っ。開けてください。ツバメが大変なんです。先生っ。」

武君が大声で先生を呼んでしばらくすると先生が私服のまま現れました。

「あれっ君は武君じゃないか。もう今日の診察は終わったんだよ。」

「先生。ツバメが死にそうなんです。」

「ツバメ？しかしねえ・・・」

大次郎君は目にいっぱい涙をためて先生に頼みこみました。

「お願いします。助けて下さい。」

先生は仕事が終わったばかりで非常に疲れていたのですが大次郎君の涙を見るとそのまま帰すことができなくなってしまいました。

「宜しい。なかにはいつて。」

先生は急いで私服のうえから白衣を着ると大事そうにツバメを大次郎君からとりあげ、その傷口を診ました。

ツバメは初めは必死に翼をひろげて逃げようとしたり、ツピー、ツピーと鳴いたりしていましたがここに連れてきたときはかなり弱ってぐったりとしていました。

「先生はツバメを診るのは初めてなんだ。犬や猫ばかり診ているからねえ。」

先生があまり自信がなさそうにそう言うと大次郎君は余計に不安になり泣きながら先生に訴えました。

「先生。お願いします。そのツバメは僕が・・・。僕がパチンコで打って傷つけてしまったんです。助けて下さい。」

大次郎君があまりに必死になってるんだ。その気持ちがきつとこのツバメに通じるよ。」

それから先生は本を見ながら根気よくツバメの手当てを続けました。

大次郎君と武君は一言も話もせずじっと祈るような気持ちで先生を見ていました。

1時間くらいただでしょうか。

先生は手に持っていたピンセットを置くと、額の汗をタオルで拭いながら二人に言いました。

「このツバメはねえ、今年巣立ったばかりの若鳥でね、冬になるまでに南の国に渡らなくちゃならないから飛ぶ練習をしていたんだよ。そこにたまたまパチンコの玉が飛んできて・・・」

そこまで話すと大次郎君の顔が真っ青になったので先生はあわてて話題をかえました。

「ん、うんっ。それでねツバメの傷は幸いなことに致命的な部分じゃなかったよ。」

先生は、二人を少しでも安心させようとしてしました。

しかし、いっておかなければならないことが残っていました。

先生は顔をひきしめて、

「でもね、今年は南の国に渡るのは無理だね。」

二人は手当をすればすぐに治ると思っていたらしく先生の言葉に驚きました。

先生の話によると一年間は傷の治療に専念して春になれば序々に飛行の練習をし、自分で餌を捕獲できるようになってはじめて仲間たちと行動を共に出来るということでした。

先生は大次郎君のほうを向き、あらたまった調子で言いました。

「大次郎君。今お話ししたようにツバメが元気になるまでにはとても時間がかかるんだ。でも先生は他の動物たちもたくさん診なければならない。だからこのツバメは君にみてもら

わなければならない。できるかね？」

大次郎君はすぐさま大きくなびきました。

先生は大次郎君の頭をなでながら、

「ようし。じゃあ君のご両親に了解をもらおう。そこの電話を使っていいから家に連絡しなさい。」

先生のいわれるままに大次郎君は電話を手にして家に電話しました。

すると待ち構えていたかのように大次郎君のお母さんが電話にでました。

「大っ！こんなに遅くまで何してるのっ。」

時計は夜の8時をまわっていました。夢中になっていたので時間がたったことも、家に連絡することも忘れていたのです。

お母さんもかなり心配していたらしく、すごいけんまくで大次郎君を責めたてました。そんな状況になったので大次郎君はツバメのことも遅くなったこともうまく説明できません。

「うん、お母さん。僕、ツバメがけがしていぬねこ病院でみてもらって手術して、このツバメ僕が育てるんで電話して。あれっ？」

ここからは先生に替わってもらって事情を説明してもらいました。

傍では武君が入院してだいぶ元気になった愛犬の白を発見してうれしそうにみつめています。

(家)

大次郎君が籠のなかのツバメをみつめているとき父親が仕事場から帰ってきました。

母親が帰ってきたばかりの父親に今日の出来事を説明すると、

「すごいじゃないか。パチンコでツバメを捕るなんて。大は才能があるんじゃないか。」

と父親はこともなげにそう言うと、

「お父さん、なんてこというのよ。大はかわいそうなことしたって反省しているんですから。変なこと言わないで下さい。」

と母親は父親を叱るように言いました。

「変なことって、元々パチンコちゅうもんは動物を捕まえるために考えられた・・・」

母親は父親の話を遮り、

「時代が違うでしょ。せっかく大に動物愛護の心が生まれてきたというのに・・・。ちょっとお父さん。」

お父さんは、

「おお、こわ。おお、こわ。」

と言いながらおふろ場のほうに服を脱ぎながら逃げて行きました。

こうして大次郎君はツバメを飼育することになりました。

大次郎君はツバメどころか動物を育てるのも初めてでした。

だから戸惑うことばかりでしたが、獣医の先生に教えてもらったとおりに葦でねぐらをつくり、小さな昆虫を捕まえて餌にしました。

そして最初感心を示さなかった父親も演奏の指揮者に似ているとって『カラヤン』と命名し、かわいがるようになりました。

さすがに文鳥やインコのように手乗りツバメにはなりませんでしたが、餌の時間になるとチィチュロリ・チィチュロリと鳴いて甘えるようになりました。

傷も順調に治っているようで翼を広げたり狭めたりする仕草に違和感がなくなってきました。

やがて冬が訪れました。

カラヤンには未体験の季節です。

しかし家族の協力でなんとかこの寒さを乗り切ることができました。

父親が保温性の高い小さな小屋を作ってくれ、母親も大次郎君が学校で留守にしている間、こまめに小屋の温度を調節してくれました。

そんなみんなの努力でカラヤンは越冬に成功し春を迎えることが出来ました。

そして大次郎君は5年生になりちょっぴり大人になりました。

はじめて動物を育てたこの一年間はいろんな知識が身につき血となり肉となりました。

ツバメのカラヤンは見た目には元気になりましたが実際本当に元道りになるかは獣医に診てもらわなければ分かりません。

そこで久し振りに先生に診てもらうことにしました。

先生はツバメのことをよく覚えていました。

「大次郎君かあ。よく育てられたねえ。」

先生は感心したように言いました。

「ツバメは育てるだけでも難しいんだよ。それにも増してあの傷だったからねえ。」

先生はここまで回復するとは思っていなかったらしく何度も驚嘆したり、大次郎君を褒めちぎったりしていました。

そしてもう傷は大丈夫と言うお墨付きまでくれました。

「やったあ！」

大次郎君は思わずその場で叫びました。

そしていよいよカラヤンの飛行訓練が始まりました。

先生のお墨付きをもらったので簡単に飛べるようになるだろうと思っていましたがカラヤンは怖がってなかなか飛ぼうとしません。

「カラヤン。ほらっ、頑張れ。」

大次郎君はカラヤンを高いところに登らせたり両手で持ち上げたりと工夫をしましたが、思うように飛んでくれませんでした。

それから大次郎君は学校に行く前と帰ってきた時は必ずカラヤンのところに行き声をかけました。

そしてカラヤンがいつでも自分で訓練ができるようにツバメ小屋の入口を開けておくようにしました。

そんなある日のこと、いつものように大次郎君が学校から帰ってくると一匹の野良猫が小屋の入口付近をウロウロしているカラヤンを狙っていました。

野良猫はカラヤンに気付かれないようそっと近付いていってました。

大次郎君は野良猫があまりに神経を集中させて恐ろしい肢体をしていたものですから、一瞬ひるみました。

しかしひるんでいる暇はありません。

猫は今にもカラヤンに飛びかからんばかりです。

「コラッ。この野良猫野郎。あっちいけえ。」

大次郎君は大声で叫びましたが、それより一瞬速く猫はカラヤンを襲いました。

「カラヤンッ。」

大次郎君はその時やられたあっと思いました

猫は機敏な動作で小屋の入口あたりに飛び込んで言ったのです。

しかし、カラヤンはわずかに速く天井に向かって飛び上がり猫の爪と牙をかわしていました。

そうです。

カラヤンは傷の完治以来はじめて飛んだのです。

「カラヤン。」

大次郎君は安堵と喜びの気持ちで胸が熱くなり、思わず涙がほうを伝いました。

野良猫は悔しそうに「ニャー」と泣くとスゴスゴと逃げ帰っていきました。

そんなことがあってからカラヤンは序々飛べるようになり餌も自分で捕って食べる習慣もつきました。

そんなこんな夏の日曜日の朝、大次郎君が眠い目をこすりながらツバメ小屋にカラヤンを見にいくとカラヤンがいません。

大次郎君の一瞬この間野良猫が脳裏に過ぎりました。

「父さん。母さん。大変だよ、カ、カラヤンがいないよう。」

今日は父親の仕事が休みなので二人ともまだ寝ていましたが、すぐに起きてカラヤンを探してくれました。

そして玄関の方からお父さんの大きな声が聞こえてきました。

「大っ。かあさん。こっちに来てみる。」

大次郎君はおおいそぎで玄関に駆けていきました。

すると、

「ウワアッ。」

思わず溜め息がもれました。

少し遅れてやってきた母親もおなじように溜め息をもらしました。

玄関の軒先でツバメのつがいが巣を作っているのです。

そのうち一羽は間違いなくカラヤンです。

「いつの間に嫁さんをもろたんや。」

父さんがカラヤンを冷やかしました。

カラヤンはなにくわぬ顔で巣作りに励んでいました。

カラヤンはこうして巣を作り、そこには四個の卵が生まれました。

そして15日後卵がかえりかわいい黄色いくちばしをした雛が口をパクパクさせて餌を求めました。

カラヤンは親らしく献身的に雛に餌を与えていました。

その後約三週間で総ての雛が巣立ちを済ませました。

大次郎君はパチンコでカラヤンをうった時のことを思い出した。

そして、あの時死ななくて、そして殺してしまわなくて本当によかったと思いました。

あの時もし、みんなに責められなかったら、そして武くんがいぬねこ病院のことを教えてくれなかったら、そう思うと背筋がゾクッとしました。

と同時にみんなに感謝の気持ちで一杯になりました。

あれから武君とは無二の新友となり、本当の意味でのいいライバルになり、また学校でも動物を大切にすることが流行になりました。

あの時流行したパチンコは今では影をひそめ、水鉄砲遊びが子供達のトレンドィーだ。

カラヤンは雛の巣立ちとともに姿がみえなくなりました。

彼らはいよいよ南国に渡るために準備をしているのでしょう。

でも大次郎君は悲しみません。

それがツバメ本来の姿だからです。

大次郎君はカラヤンがしっかりと目的地まで飛んでいけるようにと祈りました。

そしてまた来年の春、家に巣を作ってくれればいいと思った。

遠い遠いまだみぬ南の空を眺めながら。

おわり